

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 新名氏屋敷跡（新名城跡）

2015年7月

高松市教育委員会

## 例　言

- 1 本書は分譲住宅の宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、高松市国分寺町新名に所在する新名氏屋敷跡（新名城跡）の調査報告を収録した。
- 2 発掘調査地及び調査期間、調査面積は次のとおりである。

調査地	高松市国分寺町新名字中新名 1150-1
調査期間	平成 27 年 3 月 10 日～3 月 25 日
調査面積	220 m <sup>2</sup>
- 3 発掘主体は土地所有者であり、調査は高松市教育委員会が担当し、費用は土地所有者が負担した。
- 4 発掘調査は高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課 池見渉が担当した。
- 5 整理作業は同非常勤嘱託職員 杉原賢治が、本報告書の執筆は第 1 章第 1 節を池見が、それ以外は杉原が担当し、編集は杉原が行った。
- 6 発掘調査で得られた出土遺物及び記録は高松市教育委員会で保管している。

## 凡　例

- 1 本報告書の挿図として国土地理院発行 5 万分の 1 「九龜」・都市計画図 2 千 5 百分の 1 「国分寺柏原」を一部改変して使用した。
- 2 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、方位は国土座標第 IV 系の北を表す。
- 3 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SB : 桁立柱建物	SK : 土坑	SP : ピット	SX : 性格不明遺構
------------	---------	----------	-------------
- 4 挿図の縮尺は SB の平・断面図を 1/60、SP21・31・39・47 の平・断面図を 1/40、出土遺物の実測図を 1/4 とした。
- 5 土層及び土器觀察の色調表現は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・一般財團法人日本色彩研究所色票監修）に従る。
- 6 報告書は図化した遺物が出土した遺構を中心に記述しており記述していない遺構は文末に一覧表を記載した。

## 本 文 目 次

第 1 章 調査に至る経緯と経過	第 2 節 基本層序	.....3
第 1 節 調査に至る経緯	第 3 節 調査の成果	.....3
第 2 節 調査の経過	第 4 章 まとめ	.....
第 2 章 地理的・歴史的環境	第 1 節 調査結果からみた新名氏屋敷跡の評価	.....12
第 1 節 地理的環境	第 2 節 新名氏と新名屋敷跡について	.....12
第 2 節 歴史的環境	a 地形から見た新名氏屋敷跡	.....12
第 3 章 発掘調査の概要	b 文献から見た新名氏屋敷跡と城主	.....12
第 1 節 調査方法		.....

## 挿 図 表 目 次

第 1 図 新名氏屋敷跡（新名城跡）位置図	.....1	第 7 図 SB4 平・断面図	.....8
第 2 図 周辺遺跡分布図	.....2	第 8 図 SP21・31・39・47 平・断面図	.....10
第 3 図 遺構配置図と土層断面図	.....4	第 9 図 遺構等出土遺物実測図	.....10
第 4 図 SB1・SB1' 平・断面図	.....5	第 1 表 出土遺物観察表	.....10
第 5 図 SB2 平・断面図	.....6	第 2 表 検出遺構一覧表	.....11
第 6 図 SB3・SB3' 平・断面図	.....7		

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

事業対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「新名氏屋敷跡（新名城跡）」内に位置する。本遺跡は鷺ノ山から派生した低丘陵の尾根先端付近の一帯を占め、中世前後の遺構・遺物が包蔵されている可能性が指摘されている。当該地において分譲住宅地造成工事が計画されたことから、埋蔵文化財保護と開発工事との調整を図る必要が生じた。同遺跡内では、平成23年10月に本調査地の北東約200mの地点において工事立会を実施しており、中世から近世に属すると考えられる遺構・遺物を確認している。また、26年4月に本調査地の北西で実施した確認調査では、残存状況の良好な柱穴や地形に沿って開削された溝状遺構などを検出しており、出土した土師質土器や須恵器、瓦器などの年代観から、13世紀前後以降の遺構群であると考えられた。このように、低丘陵尾根先端付近の一帯に中世から近世に属する遺構・遺物が良好な残存状況を保ち包蔵されている可能性が考えられた。工事着手に先立ち、事業者から27年1月7日付けで、香川県教育委員会教育長あてに文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出が提出された。しかしながら、当該地における埋蔵文化財の包蔵状況（密度・量）や広がり、遺構面までの深度等、保護措置を決定する際の基礎的データが欠けていたことから、14日に高松市教育委員会が確認調査を実施した。その結果、調査対象地のほぼ全域に比較的高い密度で残存状況の良好な遺構が包蔵されていることが判明した。上記確認調査の結果を受けて、香川県教育委員会教育長より2月26日付けで、工事により遺構に影響が及ぶ道路整備範囲の一部についてのみ「発掘調査」を実施する旨の行政指導が事業者になされた。これを受けて、3月2日付けで、事業者・高松市・高松市教育委員会の3者で埋蔵文化財調査協定を締結した。



第1図 新名氏屋敷跡(新名城跡)位置図(S=1/5000)

### 第2節 調査の経過

発掘調査は、3月10日より開始し、調査範囲を重機により遺構検出面まで掘削した。11日～20日に遺構掘削を行い、平面図及び断面図を作成した。24日に遺構完掘状態の写真撮影を行い、25日に全調査を終了した。4月1日から洗浄・接合復元・実測・トレースを行った後に、5月8日から執筆編集を行い7月末に報告書を刊行した。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

国分寺地区は高松市の西部に位置し、東西5km、南北8kmの広さの四方を山に囲まれた盆地状の平野を形成しており、北には卓上を呈する国分台、東には円錐形の伽藍山・六ツ目山・堂山が連なり、西には鷺ノ山・兎子山・火ノ山が連なる。これらの山塊は花崗岩の上部に浸食を受けにくい安山岩が覆っており、浸食開拓から取り残され山となっている。平野の中心部には、本津川が南から北東に向けて流れている。新名氏屋敷跡（新名城跡）は、鷺ノ山から北東に伸びる舌状台地の先端で、本津川の西岸に位置する。

### 第2節 歴史的環境

国分寺地区において、最も古い人間の営みが確認されたのはサヌカイトの原産地として知られる国分台遺跡で



第2図 周辺遺跡分布図

ナイフ形石器や翼状剥片石核など石器製作を示す遺物が多く出土している。また南部の兎子山遺跡からも旧石器やサスカイトの原石が採取されている。弥生時代には、弥生中期後半の集落遺跡である権原遺跡や本津川流域の低地部に営まれた国分寺下日名代遺跡に代表される遺跡があり、古墳時代には前期の前方後円墳である国分寺六ツ目古墳をはじめ、7世紀前葉段階まで数多くの古墳が築造された。新名氏屋敷跡（新名城跡）がある中新名地区においても、团地造成により消滅しているが、円墳と考えられる小山古墳があった（『山内村史』）。古代になると、律令制が施行されると讃岐国は11郡に分割され国分寺地区は阿野郡に属した。坂出市府中町から当地域にかけて、讃岐国府・讃岐国分寺・讃岐国分尼寺などの官営施設が集中的に整備されるのもこの時期である。

中世になると、讃岐守護として細川氏が入国する。在庁官人である讃岐藤原氏から分かれた新居氏・香西氏や、新名氏などの在地の諸勢力が、その勢力下に組み込まれることになる。しかし、細川氏は在京することが多く、西讃守護代の香川氏と東讃守護代の安富氏に讃岐を任せていたが、安富氏も在京することが多く、国人層の勢力が拡大していくことになる。その中でも香西氏は傑出しており中讃地域を支配するまでに成長する。香西氏は新居氏・福家氏・新名氏等を配下に置き、居城の佐料城の周囲に配下の諸城を數多く配置した。新名氏も例外ではなく、驚の山城を築いている。国分寺地区内には新名氏の他に、新居氏は平時の居館を新居氏館に置き、南と東に曲輪を配置する新居城を詰城として持っていた。福家氏は平時の居館を福家館に置いていた。詰城は福家城や堂山の西峰に主郭を置き、曲輪や広大な横堀を巡らせる堂山城を築いていた。その他、万灯新居氏の万燈城や末澤城・鬼無城・衣掛城なども知られる。戦国時代末期の長宗我部元親の讃岐侵攻により、天正7年（1579）には驚の山城をはじめ国分寺地区の諸城が攻められるが、後に長宗我部氏に従った。13年（1585）の羽柴秀吉による四国平定により讃岐国は仙石氏に与えられるが、この前後の国分寺地区内に居た国人層の動向などは不明である。中世における主な遺跡は、国分寺下日名代遺跡や楠井遺跡があげられ、特に楠井遺跡では、3基の窯跡が確認されており、土師質足釜・鍋・甕・壺鉢・瓦質捕鉢等が生産され生産遺跡の様相が明らかになっている。

近世に入ると領主は生駒氏から松平氏へと変わった。讃岐国分寺・驚峯寺や街道等が松平頼重により復興整備されている。

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 調査方法

確認調査の結果、現地表面下約20～30cmの深度で埋蔵文化財の包蔵状況を確認しており、造成地内の道路敷設部分については、地下の埋蔵文化財が破壊される恐れがあることから事業者と協議を行い、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について発掘調査を行った。

掘削は重機による掘削後、人力により遺構精査及び遺構埋土の掘削を行った。記録に関しては調査対象地の東側に2点の任意の基準点を設け、平面図作成を行い後に国土座標をはめ込む手法をとった。現地での遺構平面図と断面図は1/20の縮尺で作図した。写真は35mmフィルムカメラを使用し、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。また、補助的にコンパクトデジタルカメラを用いて撮影を行った。

### 第2節 基本層序

調査地は、西の鷲ノ山から派生した舌状台地の尾根先端部に位置しており、今回の調査では地山検出面がほぼ水平になっている。これは、尾根頂部付近が後世の削平により平坦化された結果と考えられる。

基本層序は最上層に現耕作土、その直下に灰黄褐色シルト層と黒褐色シルト層が見られるが、遺構・遺物は検出していない。最下位には明黄褐色細砂混じり粘土層が見られ、検出した遺構はこの層の上面から掘り込まれている。この面は遺跡全般期での地山面である。

### 第3節 調査の成果

#### SB1・SB1'（第4図）

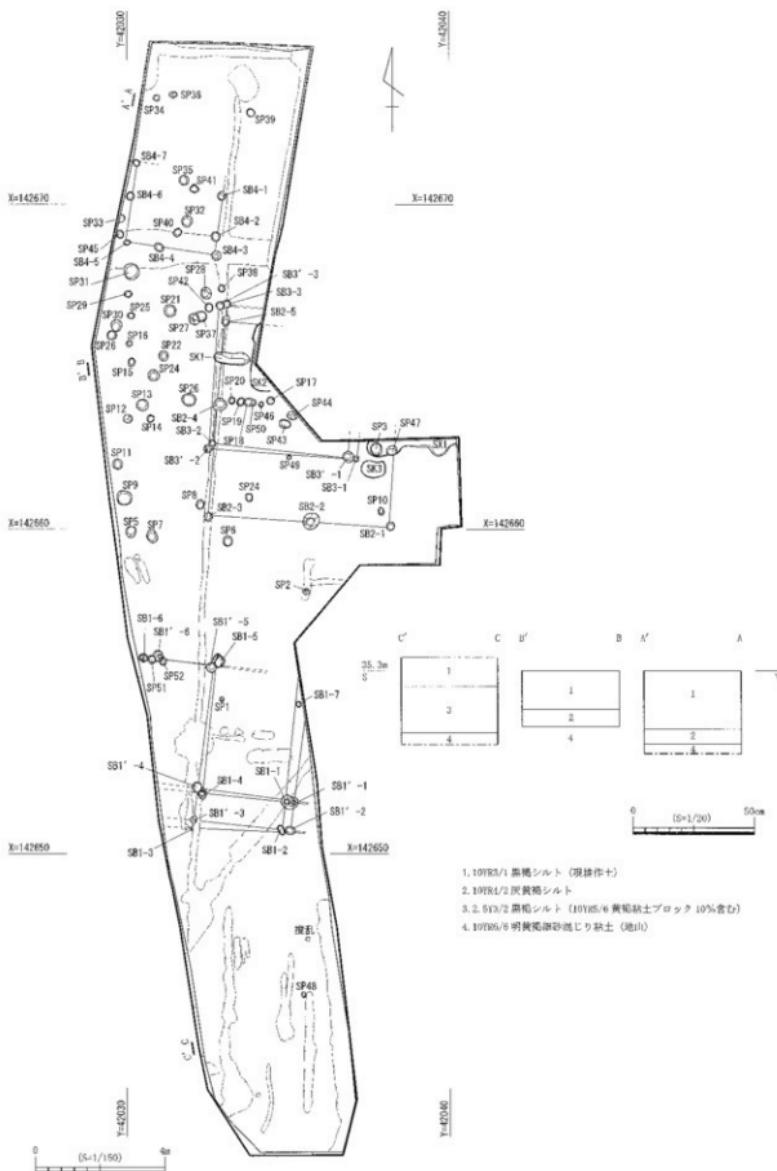
調査区南において検出した主軸方位がN-7°-Eの掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、埋土は暗オリーブ褐色シルト及び粘土・黄褐色粘土が基本であるが、一部黒褐色粘土が混じる。平面形態は楕円若しくは円形である。底面のレベルは一定していないが、柱穴は同一主軸に並びSB1-1・4・5・6の底面には一様に根石が据え付けられており、梁間1間（3.7m）×桁行2間（平均2.4m）以上の掘立柱建物で、建物の一部のみを検出し、大半は調査区外に広がると考えられる。南辺にはSB1-2・3が見られ、約1mの庇若しくは縁状の張り出しと考えられる。SB1の各柱穴には重複するようにSB1'-1～6が見られ、SB1を切っていることから建物の建替えが行われたと推測できる。

固化できた遺物は8点出土した。第9図1はSB1-6から出土した土師器碗で高台が短く断面は台形である。2～5はSB1'-1から出土した。2は須恵器杯で、口縁部が直立気味でナデ痕がある。3は土師器の杯で、底部に至る部位がわずかながら残っていることから体部が外傾気味で器高が低いと推測され、13～14世紀のものと考えられる。4は土師器碗で高台断面が台形である。5は白磁の皿で内外面とも薄く施釉されているが、外面下半は無釉である。口縁部は外反し薄く引き出していることから13～14世紀のものと考えられる。6・7はSB1'-2から出土した。6は土師器の皿で口縁部がやや内湾している。7は土師器の杯で口縁部外面直下にナデによる弱い段が見られる。直径が10cmと小さく器壁が薄いことから13～14世紀のものと考えられる。8はSB1'-5から出土した。8は土師器杯で口縁がわずかに直立しており13世紀のものと考えられる。

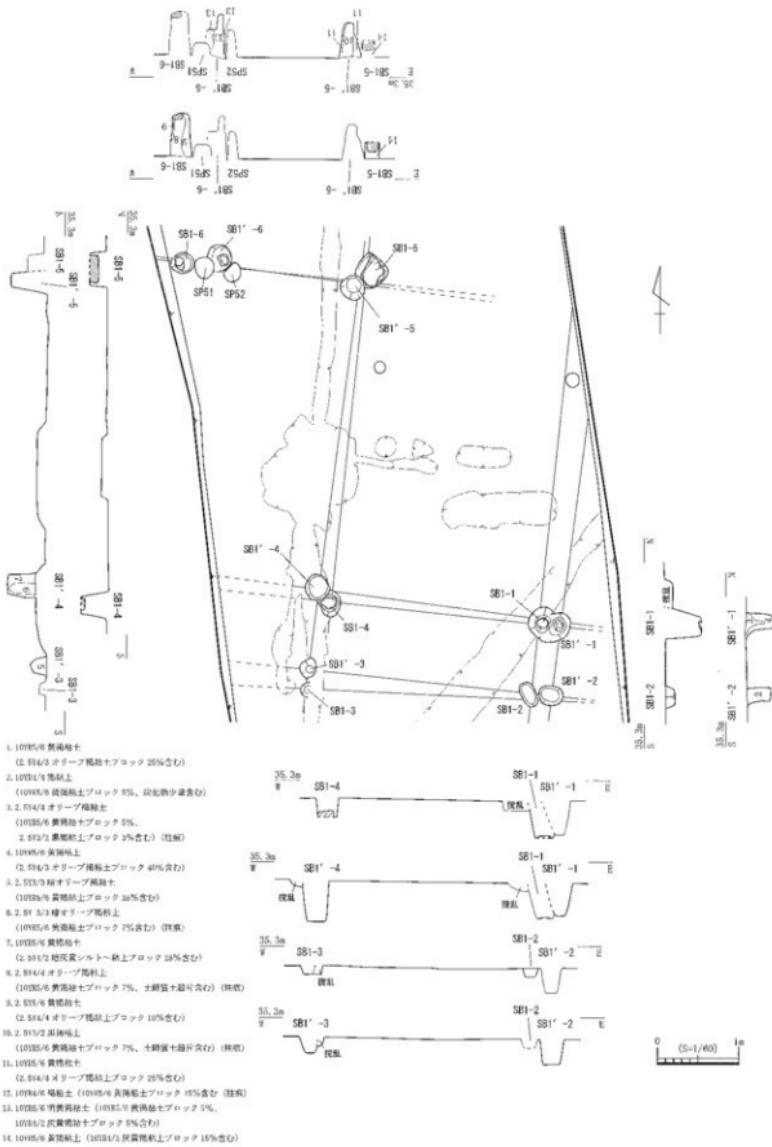
これらの遺物からSB1・SB1'とも13～14世紀の遺構であると考えられる。

#### SB2（第5図）

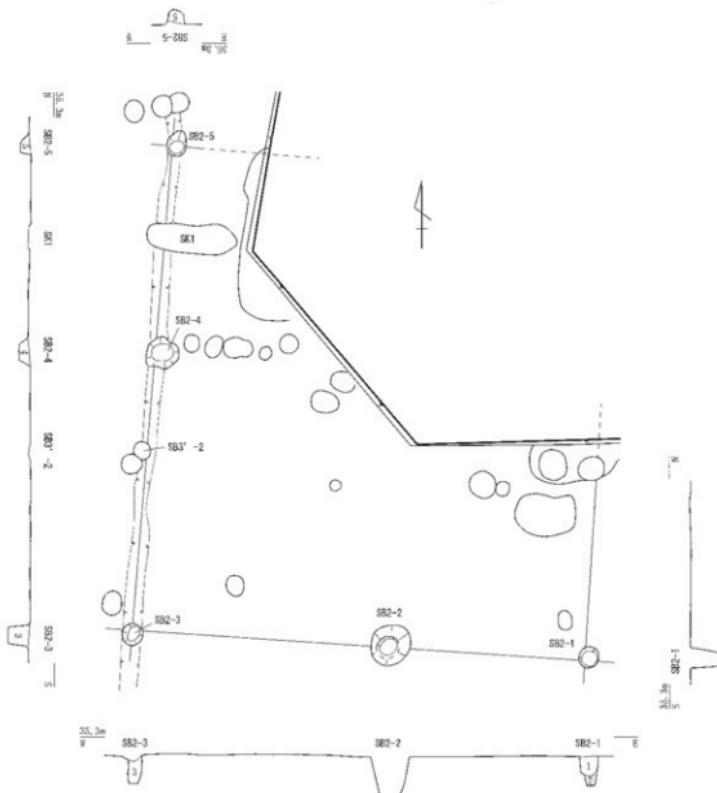
調査区中央において検出した主軸方位がN-6°-Eの掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、埋土が一部黒褐色細砂混じり粘土であるが、その他は暗オリーブ褐色シルト及び粘土・黄色褐色粘土である。柱穴は直線的に掘っているが、底面のレベルは一定しておらず、また規模も不揃いである。建物の南北部分を確認したのみで、平面形態、規模等の詳細は不明であるが、平均柱間距離は東西方向で3.4m、南北方向で3.6mを測る2間以上



第3図 遺構配置図 (S=1/150) と土層断面図 (S=1/20)

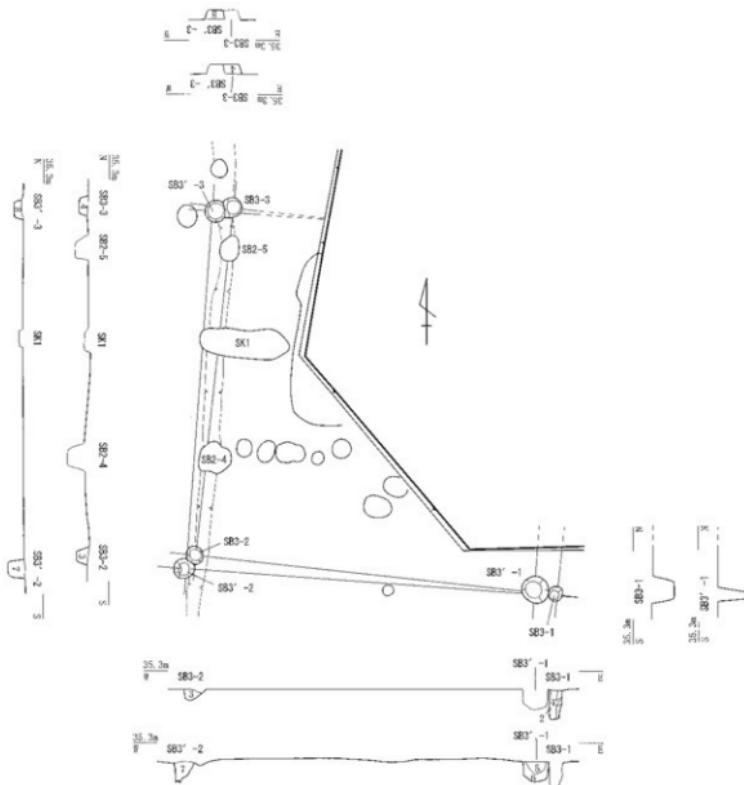


第4図 SB1・SB1' 平・断面図 (S=1/60)



1. 2. SB1/1 オリーブ繩シルト (10YRS/0 黄褐色粘土ブロック 5%含む)
2. 10YRS/6 黄褐色土 (2. SB3/3 線オリーブ繩シルト～粘土ブロック 5%含む)
3. 2. SB3/3 線オリーブ繩粘土  
(10YRS/6 黄褐色粘土ブロック 25%含む)
4. 10YRS/2 黒褐色砂混じり粘土  
(10YRS/6 黄褐色砂混じり粘土ブロック 7%、炭化物・粘土を多量に含む)
5. 2. 5Y4/2 線地質シルト (10YRS/6 黑褐色シルトブロック 3%含む)

第5図 SB2 平・断面図 (S=1/60)



第6図 SB3・SB3' 平・断面図 (S=1/60)



第7図 SB4 平・断面図(S=1/60)

× 2 間の掘立柱建物と考えられる。遺物は出土していないが、埋土が SB1 と似ていることから SB1 と同時期頃の遺構と考えられる。

#### SB3・SB3'（第6図）

調査区中央において検出した主軸方位が N - 3° - E の掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、埋土が暗オリーブ褐色シルト及び粘土・黄色褐色粘土であり、平面形態は円形である。柱穴は直線的に描っているが底面のレベルは一定していない。東西 1 間 (4.5 m) 以上 × 南北 1 間 (4.3 m) 以上と考えられ、SB3-1～3 を切るようにはそれぞれ SB3'-1～3 を検出しており、建物の建替えが行われた可能性が考えられる。

図化できた遺物は 1 点出土した。第 9 図 9 は SB3-3 及び SB3'-3 のどちらの埋土から出土したかが不明であるが、瓦器碗である。遺物による時代確定は難しいが、埋土が SB1 に似ていることから SB1 と同時期頃の遺構と考えられる。

#### SB4（第7図）

調査区北端で検出した主軸方位が N - 7° - E の掘立柱建物である。建物を構成する柱穴は、埋土が暗オリーブ褐色シルト及び粘土・黃褐色粘土を基本とするが、一部暗灰黄色粘土や黒灰黄色・褐色細砂混じり粘土や褐色シルト～粘土が混じる。平面形態は円形又は橢円であり、柱穴は直線的に描っているが底面のレベルは一定していない。現状で南北 3 間の 2.5 m × 東西 2 間の 2.8 m を測る。北東部の柱穴は削平により検出できおらず、西辺の中間柱と考える柱穴は SB4-6 のみの検出である。西辺が 2 間で東辺が 3 間と柱間の間隔の違いがあり、

SB4－7からSB4－5の間の柱穴が1つ分少ないことから、削平された可能性が考えられるが、調査区外へ延びる可能性もある。遺物は出土しておらず遺構の時期が不明だが、柱穴埋土がSB1～3とは明確に違うことから時期が異なる可能性がある。

#### SP21（第8図）

調査区北端で検出した柱穴で直径37cm、深さ32cmを測る。埋土は2層に分かれており上層に炭化物を多量に含む褐色粘土、下層は明黄褐色シルト～粘土である。図化できた遺物は第9図の10の備前焼の甕1点のみである。

#### SP31（第8図）

調査区北部で検出した柱穴で直径50cm、深さ55cmを測る。埋土は単層で明黄褐色細砂混じり粘土である。図化できた遺物は第9図の11の土師質土器の甕のみで、摩滅が著しく内外面にわずかにナデ、外面に指押さえが残る。頸部が緩やかに外反していることから11世紀頃のものと考えられる。

#### SP39（第8図）

調査区北部で検出した柱穴で直径25cm、深さ13cmを測る。埋土は単層で黒褐色粘土である。図化できた遺物は第9図の12の瓦器椀のみで、口縁部がやや外反し端部が丸く收められ、内面に斜めのヘラミガキを施していることから和泉産で13世紀頃のものと考えられる。

#### SP47（第8図）

調査区北部で検出した柱穴で直径32cm、深さ41cmを測る。埋土は2層に分かれており上層は炭化物を含むオリーブ褐色粘土、下層は炭化物を含む暗オリーブ褐色粘土である。図化できた遺物は第9図の13の土師質土器の鍋のみで、口縁部に向けて内側が見られ立ち上がり気味なことから13世紀頃と考えられる。

#### その他のピット（SP）

調査区全体にわたって計53基の柱穴を検出した。平面は円形又は梢円で断面に柱痕が見られるものが多い。規模及び埋土については、第2表のとおりである。

#### 土坑（SK）

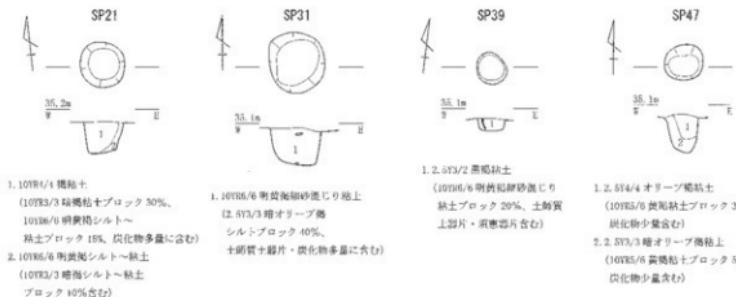
調査区中央で3基の土坑を検出した。規模及び埋土については、第2表のとおりである。遺物が出土しておらず、遺構の時期は不明である。

#### 不明遺構（SX）

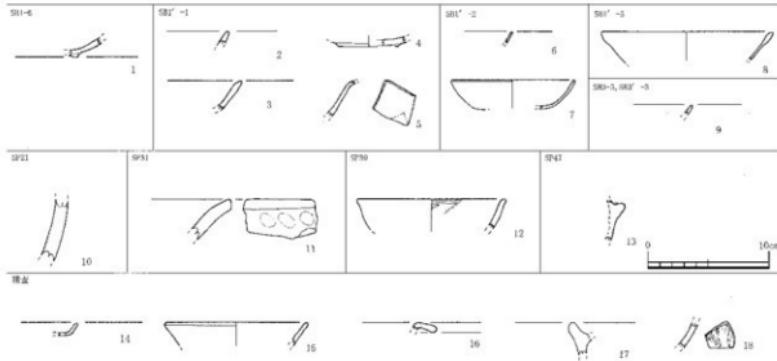
調査区東端で検出した落ち込みである。大部分が調査区外へ広がることから、明確な平面形は確認できていない。規模及び埋土については第2表のとおりである。遺物が出土しておらず遺構の時期は不明である。

#### 遺構面精查

図化できた遺物は5点出土した。第9図14は土師器皿で、外傾する口縁部を持ち底部系切痕があることから13世紀と考えられる。15は須恵器椀で重ね焼き痕が見られ、口縁部が外傾気味であることから12～14世紀のものと考えられる。16は土師質土器の熔接である。17は土師質土器の足釜で、短い口縁部と瘤状の鉢部であるため15世紀中葉～16世紀前半と考えられる。18は内外面とも施釉されており外面に刷毛目を施した肥前系陶器の鉢で17世紀と考えられる。



第8図 SP21・31・39・47平・断面図(S=1/40)



第9図 遺構等出土遺物実測図(S=1/40)

第1表 出土遺物観察表

編 号	出 土 場所	種類	層 級	古合(%) (10Y6/6 10Y3/3 10Y6/0)		文様・調査		色調	粘 土	滑 面	圖 考
				上層	底層	外觀	内面				
1. 10Y6/6	土師器	陶	-	-	-	[1.6] ナゲ [1.2] ナゲ	ナゲ ナゲ	灰白(10Y6/1) 灰白(10Y7/1)	褐色(10Y6/1) 褐色(10Y7/1)	平滑	良
2. 10Y6/1	須恵器	陶	-	-	-	[1.6] ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y7/1)	平滑	良
3. 10Y6/1	土師器	陶	-	-	-	[1.6] ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y6/1)	平滑	良
4. 10Y6/1	土師器	陶	-	(4.4)	[0.9]	ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y7/2)	微 赤色斑点	良
5. 10Y6/1	骨器(内側)	骨	-	-	[3.0]	無縫隙	無縫隙	灰白(10Y7/1)	褐色(10Y7/1)	粗粒	良
6. 10Y6/1	土師器	陶	-	-	[0.9]	ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	平滑	良
7. 10Y6/1	土師器	陶	-	(10.2)	(6.4)	ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	平滑	良
8. 10Y6/1	土師器	陶	-	(14.0)	-	ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	平滑	良
9. 10Y6/3	土器	陶	-	-	[3.4]	ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	平滑	良
10. 10Y6/3	土器	陶	-	-	[0.9]	ナゲ	ナゲ	灰白(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	平滑	良
11. SP21	土師質土器	陶	-	-	[6.0]	ナゲ	ナゲ	褐色(10Y6/2)	褐色(10Y6/2)	平滑	良
12. SP39	土器質土器	陶	(28.4)	-	[1.7]	ナゲ	ナゲ	褐色(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	粗粒 良石・高光沢	良 材料者
13. SP39	土器	陶	(12.2)	-	[3.4]	エコナゲ	ナゲのレーハミガ キ	褐色(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	粗 良石	良
14. SP47	土師質土器	陶	-	-	[3.4]	ナゲ	ナゲ	褐色(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	粗 良石	良
15. 頭骨	人頭骨	骨	-	-	-	ナゲ	ナゲ	褐色(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	粗 良石	良
16. 頭骨	人頭骨	骨	-	-	-	ナゲ	ナゲ	褐色(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	粗 良石	良
17. 頭骨	人頭骨	骨	-	-	-	ナゲ	ナゲ	褐色(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	粗 良石	良
18. 頭骨	人頭骨	骨	-	-	-	ナゲ	ナゲ	褐色(10Y6/1)	褐色(10Y6/2)	粗 良石	良

第2表 検出出遭構一覧表

通過 部分	平面形	規格(△)	部位	性質	性質 - その他	西
S31-1	片	60	底	41.8		
S31-2	両汚	23	19	11.0	0.0%の黄褐色土	
SH1-1	門	17	-	11.0	2.5%のオリーブ色粘土	
SH1-1	両	35	-	23.0		
SH1-5	両	31	-	21.6	10%の黄褐色土	
SH1-6	両	30	-	54.1	砂質、2.5%のオリーブ色粘土 (底質を含む) 粘土: 2.5%の黄褐色土	礁石あり
SH1-1	両汚	61	-	60.0	砂質、2.5%のオリーブ色粘土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-2	両汚	30	29	29.7	0.0%の黄褐色土 (底質を含む) 砂質	礁石あり
SH1-2	両	25	-	49.9	2.5%のオリーブ色粘土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-4	両	33	-	30.6	砂質、2.5%のオリーブ色粘土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-4	両	29	-	41.9	砂質、2.5%の黄褐色土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-5	両	23	-	32.2	0.0%の黄褐色土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-5	両	23	-	41.6	2.5%の黄褐色土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-5	両	27	-	48.2	2.5%の黄褐色土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-5	両	69	-	68.2	2.5%の黄褐色土 (底質を含む) 粘土: 10%の黄褐色土	礁石あり
SH1-5	両	27	-	28.0	2.5%のオリーブ色粘土	礁石あり
SH1-4	両	42	-	27.8	0.0%の黄褐色土 (底質を含む) 砂質 (底化物・施土を多量に含む)	
SH1-5	相汚	32	24	18.8	2.5%の黄褐色土	
SH1-5	片	18	-	37.4	0.0%の黄褐色土 (底質を含む) (底化物を多量含む) 両汚: 10%の黄褐色土	
SH1-2	門	22	-	18.1	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を少量含む))	
SH1-3	門	25	-	13.2	2.5%のオリーブ色粘土	
SH1-3	両	31	-	27.7	2.5%のオリーブ色粘土	
SH1-3	両	26	-	25.6	2.5%のオリーブ色粘土	
SH1-3	両	27	-	11.5	2.5%のオリーブ色粘土	
SH1-4	門	28	-	11.5	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を少量含む))	
SH1-5	両	29	-	15.3	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を含む))	
SH1-5	両	29	-	12.4	2.5%の黄褐色土	
SH1-4	相	31	28	16.8	2.5%のオリーブ色粘土 (底土)	
SH1-5	門	40	-	12.5	0.0%の黄褐色土 (底土)	
SH1-6	片	28	-	14.0	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を少量含む))	
SH1-7	門	21	-	7.3	0.0%の黄褐色土 (底土)	
SH1-7	相	21	-	15.6	2.5%の黄褐色土 (底土)	
SH1-8	両	12	35	5.5~8.9	0.0%のオリーブ色粘土 (底土)	
SH2	不整形	212	(55)	4.5	0.0%のオリーブ色粘土	
SH3	横汚	78	50	2.4	0.0%のオリーブ色粘土	
SP1	内	14	-	6.6	砂質、2.5%のオリーブ色粘土 (底土: 10%の黄褐色土)	
SP2	肉	2	-	28.5	0.0%のオリーブ色粘土 (底土: 10%の黄褐色土)	
SP3	門	28	-	22.1	0.0%の黄褐色土 (底土: 10%の黄褐色土)	
SP4	横汚	26	23	16.5	2.5%の黄褐色土 (底土)	
SP5	門	30	30	32.9	0.0%のオリーブ色粘土 (底土を多量に含む)	
SP6	門	40	-	9.0	砂質、2.5%のオリーブ色粘土 (底土を多量に含む)	
SP7	横汚	60	32	34.4	2.5%の黄褐色土 (底土 (底化物を少量含む))	
SP8	横汚	30	26	22.8	砂質、2.5%のオリーブ色粘土 (底土)	
SP9	肉	44	-	34.2	0.0%の黄褐色土 (底土を多量に含む) (底化物を少量含む)	
SP10	横汚	23	17	42.0	2.5%のオリーブ色粘土 (底土)	
SP11	肉	31	-	34.5	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を含む))	細孔質岩盤を含む
SP11	肉	31	-	18.4	10%の黄褐色土 (底土 (底化物を少量含む))	
SP13	白	37	-	33.5	10%の黄褐色土 (底土)	
SP14	門	22	-	7.6	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を少量含む))	
SP15	横汚	26	19	20.9	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土	
SP16	門	29	-	25.7	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物・施土を含む)) (底土)	
SP17	門	21	-	12.5	2.5%の黄褐色土 (底土 (底化物・施土を含む))	
SP18	肉	25	-	16.9	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物・施土を含む))	
SP19	南汚	29	22	9.1	2.5%のオリーブ色粘土 (底土)	
SP20	横汚	22	19	4.9	2.5%のオリーブ色粘土 (底土)	
SP21	肉	37	-	32.9	0.0%の黄褐色土 (底土を多量に含む)	
SP22	門	32	-	30.1	10%の黄褐色土 (底土)	
SP23	門	38	-	28.0	0.0%の黄褐色土	土面質土質を含む
SP24	門	26	1	31.1	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物・施土を含む))	
SP25	門	32	-	18.9	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物・施土を含む))	
SP26	門	45	-	25.0	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物・施土を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土	
SP27	門	36	-	45.6	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物・施土を含む))	
SP28	門	27	-	21.2	2.5%の黄褐色土	
SP29	門	26	-	16.5	0.0%の黄褐色土 (底土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を多量に含む)))	
SP30	門	27	-	25.0	0.0%の黄褐色土 (底土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を多量に含む)))	
SP31	門	60	-	41.7	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	上部質土質を含む
SP32	門	36	-	22.0	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP33	門	125	-	29.9	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP34	門	21	-	7.9	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP35	門	30	-	35.2	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP36	横汚	26	18	9.7	10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP37	肉	34	-	36.9	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP38	門	22	-	26.2	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP39	門	35	-	13.0	2.5%の黄褐色土	
SP40	門	25	-	26.2	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	上部質土質を含む
SP41	木質門	28	-	28.0	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP42	門	26	-	17.5	2.5%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP43	門	36	27	36.2	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP44	横汚	20	28	47.0	10%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP45	門	26	-	12.9	2.5%のオリーブ色粘土 (底土)	
SP46	門	17	-	9.7	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP47	門	32	-	40.6	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を含む))	
SP48	横汚	18	13	15.4	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を含む))	
SP49	門	15	-	33.5	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む))	
SP50	門	21	-	9.0	10%の黄褐色土	
SP51	門	26	-	18.3	10%の黄褐色土	
SP52	横汚	25	19	31.3	0.0%の黄褐色土 (底土 (底化物を含む)) 粘土: 2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を含む))	
SP53	門	18	-	6.7	2.5%のオリーブ色粘土 (底土 (底化物を含む))	
SL1	不整形	(280)	(50)	6.0	0.0%のオリーブ色粘土	

## 第4章 まとめ

### 第1節 調査結果からみた新名氏屋敷跡の評価

新名氏屋敷跡は、同時代の一次資料を欠くため江戸時代以降に成立した文献史料や伝承に頼らざるをえないが、14世紀後半～16世紀後半まで存続していたと考えられる。

調査の結果、調査区全域から多数のピットが検出され、掘立柱建物が4棟検出できた。特にSB1・SB1'に関しては一部を検出しただけではあるが、根石を用いた掘立柱建物で底を持つ建物が予想される。またSB1'及びSB1・SB3からは13～14世紀の遺物が出土していることから、この時期に当該地区において何らかの施設群があつたと考えられる。

今回の調査で確認した遺構及び周辺部における既往調査で確認した遺構からも、13～14世紀の遺物が出土しており同時に形成されたと考えられる。これらの遺構から本調査地が位置する尾根上に新名氏の屋敷を構成する建物群が展開していた可能性も考えられるが、今回の調査区からは14世紀以降の遺物の出土が極めて少ない。また遺物も少量であるため新名氏屋敷跡との明らかな関係性を確認できなかった。『讃岐国名勝図会』に記載のある城坂を伴う城屋敷と呼ばれる部分は、調査区の北に位置する現在削平されたと考えられる尾根頂部付近にあることから、この場所に屋敷の主要な部分が存在していた可能性も否定できない。このように今回の検出した遺物や遺構は、13～14世紀が中心となることから新名氏の屋敷跡との関係が明らかではなく、今後の調査事例の蓄積を待って新名氏屋敷の再検討を行う必要があると考えられる。

### 第2節 新名氏と新名氏屋敷跡について

#### a 地形から見た新名氏屋敷跡

新名氏屋敷跡とされる場所は、堂山・鷲ノ山に囲まれた周囲より2～5m程度高い舌状台地の先端部に位置し、東に本津川が流れている要害の地である。『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』によると、台地の南端の野播天神南西にある台地を切断している一段低い帶状の水田が畝切状地形であり、台地の南東は現在も残る橋池の旧堤防から、かつては谷状湿地帯であったと推測される。また台地の周囲には堀を連想させる細長い耕作地が残っている。想定される城跡の内には現在目に見える城郭遺構の痕跡は残っていないが、後述の『讃岐国名勝図会』からは城屋敷という地があると記載されている。

#### b 文献から見た新名氏屋敷跡と城主

新名氏屋敷跡（新名城跡）の存続時期を文献史料から読み解く。ただし、新名氏屋敷跡（新名城跡）に関係する中世文書などが多く、出典のほとんどを近世文書に頼らざるをえなかった。

香西成資によって書かれた寛文3年（1663）『南海治乱記』及び、享保4年（1719）『南海通記』のいずれにも、鷲の山城跡の記述はあるが新名氏屋敷跡には触れていない。文政11年（1828）に中山城山によって書かれた『全讃史』の「古城跡」には新名村の城跡として鷲山城と柏原城があり、鷲山城跡の項目で「新名内膳、之に居りき。新名藤大夫の裔なり。天正十一年、土佐元親内膳を殺し、入交織人をして之に居らしめ、以て近郡の領を有せり」とあるが、ここでも新名氏屋敷跡には触れられていない。弘化3年（1846）に片山駒次郎によって書かれた『讃陽古城記』及び附録の『翁嶋夜話城蹟抜書』には「新名村城跡 鷲峯寺山城・里城 新名源左衛門居」、「柏原村城跡 新名源左衛門」、(斐云。菟上山城跡ナラシカ)としかない。鷲峯寺山城は鷲の山城跡のことを指し、里城が新名氏屋敷跡のことを指すならば城主は新名氏であると考えられるが、直接里城である記述はない。嘉永6年（1853）梶原藍水によって書かれた『讃岐国名勝図会』には新名城跡の資料が唯一出てくるが「同所にあり今城屋敷といふ地あり此地なり井あり城渠と云ふ」だけで、城郭の存続期間には触れていない。

しかし、「翁嶋夜話城蹟抜書」の菟上山城の項目に「柏原に在り新名内膳光景が居る。天正11年5月内膳を殺しその後入交織人が代わりにここに居る。13年5月蔵人佐に走りついに堀為る。」とある。また『讃岐国名勝図会』の菟上山城の項目に「同所（柏原村）にあり 新名内膳の裔跡にて内膳臣某をして是を守らしむ。歎至れば内膳も来り守ると云へり」とある。

新名及び柏原（ひい）地区の現在知られている城跡は、新名氏屋敷跡（新名城跡）と鷲の山城跡のみである。当

地区にはトカメヤマ（いた）もしくはトカミヤマという地名はなく、当初読み方が同じである鷺ノ山の南にある十瓶山、もしくは三豊市高瀬町にある爺神山のことを指すと考えたが、十瓶山に城があったという文献は見あたらない。爺神山には爺神山城跡（いた）があるが、安政5年（1858）に書かれた『西讃府志』には菟上山城（いた）の項目に『此地中村ニアリ、相傳フ詫問辨正居レリ、天正年中滅ブ・・（略）』とあり、天正年間（1573～1592年）は詫問辨正が城主であることから、爺神山城とは別と考えるべきであろう。菟上山城のその他の可能性を考えると、地区的南に位置する兎子山の可能性を考えたが、同山には城の伝承もなく城郭遺構も見つかっていない。しかし兎子山は新名氏屋敷のすぐ南に位置し台地で繁がっていることから、新名氏屋敷のことを菟上山城と呼んでいた可能性もある。（いた）

このように文献において、新名氏屋敷跡（新名城跡）が鷺の山城の里城（居館）との明確な記述はないが、福家氏館や新居氏館などの周辺の城館との関連性を考えると、鷺ノ山の近くにある館とされる場所は新名氏屋敷跡のみであるため、現段階では里城（居館）と考えることが妥当と思われる。新名氏屋敷跡を里城と考えるなら、鷺の山城跡の城主の動向から存続時期が推定できる。『讃岐国名勝図会』の「新名家記」には「高田藤太光業と云ふ者、延文二年、主君三野郡詫問辨正城主詫問辨正とともに・・（中略）・・貞治元年、細川右馬頭頼之朝臣、相模守清氏を討たんと当国に来り軍兵を集めし折、光業も招に応じ、頼之朝臣に属して高屋城の戦に参加したり・・（中略）・・当郡柏原・新名・国分の三村を賜ひしかば、応安元年八月三日当郷に移る。ゆえに高田を改め新名と云う」とあり、応安元年（1368）が初現と考えられる。この後、新名内膳助の頃までは新名氏の動向がわからぬが、天正7年（1579）に土佐の長宗我部元親が、中讃地域の攻略を開始すると讃岐の国人衆の動きが活発になることから、新名氏の動向も『全讃史』の鷺山城の項目や『南海治乱記』・『南海通記』から「夫ヨリ新名内膳助力寵りタル鷺山ノ城ニ取寄ル。此山ハ土高丸鷺ノ峯トテ国中ニ三ツノ險要也。然レドモ分内狭シテ大身ノ要城ニナラズ新名コレニ居ス・・（中略）・・中讃郷練郡鷺ノ山城主新名内膳助ヲ殺害シテ其城ヲ交番右衛門ニツカハシ入城ス。」と出てくる。のことから内膳助が守る鷺の山城も攻略目標にされており、後に降伏をしたと判る。その後天正11年（1583）に内膳助は元親によって殺害され、代わりに入交氏が鷺の山城に入城している。

天正13年（1585）の羽柴秀吉による四国平定の際に、入交氏は鷺の山城を放棄し土佐に退去し、『翁嶋夜話城譜抜書』ではその後すぐに廢城となったとされる。しかし、『讃岐国名勝図会』の「新名家記」では、「慶長五年九月、閑ヶ原の役にも元親に従ひし（いた）に、大坂方大いに敗軍に及びしかば光景（内膳助）もその場を逃れ、攝州池田に忍びて原田権内と改名し世を送りしが、同七年当国に帰りけれど、旧領は時の守護（いた）生駒家の領地となりしかば寒川郡津田浦に仮住居し・・（中略）・・同年七月十六日、病みて死す」とする記述もあり、いざれが正しいかは判らない。どの文献も江戸期に成立している文献であるため確証はないが、天正7年前後の記述は合致してくれる。また『讃陽古城記』には「鷺峯寺山城」と「柏原城」の項目には、新名源左衛門なる人物がいる。この新名源左衛門がいつの時代の人物か不明ではあるが、入交氏退去後の城主である場合はしばらく城が機能していた可能性もある。これらを総合すると文献からは鷺の山城跡及び新名氏屋敷跡が、少なくとも応安元年（1368）頃～天正13年（1585）頃まで存続していたと考えられる。

注1: ここで出てくる柏原村は、現在の柏原地区のことを指し、新名地区に接している。

注2: 『讃岐名勝図会』を元に書かれた、『古今讃岐名勝図絵』の菟上山城跡の項目に振り仮名として「トカミヤマ」とある

注3: 『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』において、爺神山城の項目で爺神城跡（菟上山城跡）とある。

注4: 兔は兎の異字体

注5: 『全讃史』の「古城志」に有る新名村の柏原城も新名氏屋敷跡のことを指す可能性がある。

注6: 長宗我部元親は慶長4年（1599）の5月に死去しているため、閑ヶ原には嫡孫の盛親が出陣している。

注7: 慶長7年（1602）時点では、讃岐園主は生駒一正であるが、一正是讃岐守護職を任官されてはいない。

#### 参考文献

香西成資 1663『南海治乱記』1719『南海通記』

中山鶴山 1828『全讃史』

片山胸次郎 1846『讃陽古城記』及び『翁嶋夜話城譜抜書』

梶原藍水 1853『讃岐国名勝図会』

京極家編纂 1858『西讃府志』

梶原猪之松 1930『古今讃岐名勝図絵』

国分寺町誌編纂委員会 2004『さきぎく国分寺町誌』

太宰府市教育委員会 2000『太宰府糸井跡X V 一鹿齋器分類編-』

香川県教育委員会 1995『国分寺橋井遺跡』

香川県教育委員会 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』



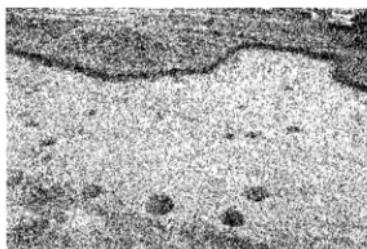
完掘状況 南から



完掘状況 北から



SB1・SB1' 北西から



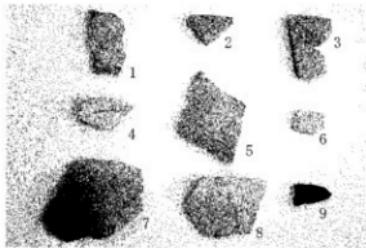
SB2・SB3・SB3' 西から



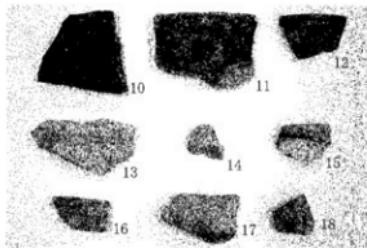
SB4 南から



SB1-7・SB1' -7



SB1・SB1' ・SB3・SB3' 出土遺物



SP21・31・39・47・精査 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しんみょうしやしきあと (しんみょうじょうあと)							
書名	新名氏屋敷跡(新名城跡)							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第164集							
編著者名	池見渉・杉原賢治							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2015年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。〃'	東経 。〃'	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
しんみょうしやしきあと 新名氏屋敷跡 (しんみょうじょうあと) (新名城跡)	香川県 たかがん 高松市 たかまつし 国分寺町 こくぶんじちょう なかしんみょう 中新名	37201		34° 17' 6"	133° 57' 29"	2015.3.10 ~ 2015.3.25	220 m <sup>2</sup>	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新名氏屋敷跡 (新名城跡)	城館跡	中世	ピット 掘立柱建物 土性格不明遺構	土師器 土質土器 須恵器 陶器				
要約	新名氏屋敷跡(新名城跡)は、鷺の山城とともに新名内膳助の城として知られる。今回の調査では掘立柱建物4棟を検出した。このうち1棟は底を持つ建物と想定される。これらの遺構からは13~14世紀の遺物が出土しており、当該期に何らかの施設群があつたと考えられる。しかし、本調査では新名氏屋敷跡と検出した遺構及び遺物との明らかな関係性は確認できなかった。							

### 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 新名氏屋敷跡(新名城跡)

平成27年7月31日

編集/発行 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目8番15号

印 刷 有限会社 中央ファイリング